

氏名	なかぎり まりこ 中桐 万里子
学位(専攻分野)	博士(教育学)
学位記番号	教博第42号
学位授与の日付	平成17年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	教育学研究科臨床教育学専攻
学位論文題目	方法としての〈語り〉 ——報徳言説という語態——

論文調査委員 (主査) 助教授 皆藤 章 教授 矢野 智司 教授 鈴木 晶子

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、日常というテーマをめぐる人間研究の新たな〈方法〉としての臨床教育の可能性を提唱するものである。具体的には、二宮尊徳(金治郎)(1787-1856)の言説を〈語り〉と「見立てる」という臨床教育の〈方法〉によって、従来、日常生活において自明の意味を付与されてきたできごと、ないしは「誤差」や「例外」として扱われてきたできごと新たな〈意味〉が見出されていく在りようと、それによって日常生活に新たな気づきをもたらされ営みが賦活していく様相を明らかにすることで、臨床教育という〈方法〉の独自性を〈語り〉を軸に展開させたものである。

論文は、著者の問題意識を明確にする第1章「新たな〈方法〉へ」、従来の尊徳研究法を概観した第2章「尊徳研究法の類型化」、報徳言説を取り上げ臨床教育の〈方法〉を適用することによって見出された地平を論じた第3章「『三才報徳金毛録』という〈語り〉」および第4章「『二宮翁夜話』という〈語り〉」、そしてこれら諸論考に一貫性をもたせ論文として整合的にまとめあげる意図で置かれた序章および終章によって構成されている。

序章では論文全体を俯瞰する形で各章の内容が先取りの概観されている。加えて、著者の関心の方向と以降の各章に通底する臨床教育学のスタイルが明確に述べられている。

第1章では、本論文の立場に関わる重要な点として、臨床教育の研究にまつわる著者の根本的な〈方法〉とその適用が論じられている。その〈方法〉とは対象となる具体的な言説を〈語り〉と見立て検討し、その検討から生まれた新たな〈意味〉をふたたび人間の営みを巡る諸研究に還流していこうとするものである。したがって本論文では、二宮尊徳という歴史上の人物研究でもそのテキストの研究でもなく、臨床教育という〈方法〉そのものを〈語り〉を軸にして検討することにその独創性があることが強調されている。

そして、この〈方法〉が第3章で詳細に取り上げられる『三才報徳金毛録(以下、『金毛録』)』(1834)において吟味・検討されている。その検討のなかで、どのような「見立て」でもってこの言説に応えるのが模索された結果、著者は言語内容ではなく〈言説形態〉に着目し Jakobson (1896-1982) の論を手がかりとする。この論を手がかりにして、〈図像言説〉および〈詩的言説〉という「見立て」を導き、この見立てをもとに『金毛録』において新たな〈意味〉が見出される可能性を論じている。こうした過程を経て最後に、〈言説形態〉という場所こそが臨床教育という〈方法〉にとっては注目すべき生産的な場所となり得たと結論づけ、第3、4章の論考の基盤としている。

第2章では、二宮尊徳にかんする多領域にわたる多様な研究が、まず尊徳研究の全体的な動向を捉えて概観されている。次いで、本論文の趣旨に合致するように「内容」ではなく手法、すなわち研究の「立場」に着目しつつ、大藤修(1948-)、下程勇吉(1904-1998)、Bellah(1927-)、内村鑑三(1861-1930)、中井久夫(1934-)の諸研究が取り上げられている。これら諸研究を概観することによって著者は、研究者によって「立場」は異なるものの、いずれも二宮尊徳のテキストを史実が記述された「資料」として扱い、思想や仕法あるいは人物の「真実」に迫るための言語媒体としてきた点での共通性を指摘している。これによって、本論文が二宮尊徳の実像把握を課題としたものではなく、臨床教育学という新たな研究スタ

イルによって報徳言説に出会いなおす試みであることが明確化されている。

第3章は、報徳思想の奥義書とされながらも、きわめて難解で読解不可能、意味不明などとされてきた『金毛録』にたいし、第1章で論じられた〈語り〉における〈言説形態〉のはたらきを手がかりにしながら、「円環的構造」と「反復」という形態的特徴についてそれが『金毛録』言説の〈意味〉の発現にかかわるとした仮説的な論述が展開されている。

その結果、それらが『金毛録』言説の〈意味〉の発現を支える根幹的役割をもって機能していることが示されている。それによって発現したのは「天道／人道の宇宙論」における人間の在りようとしての『人道』という〈意味〉であり、天道に半分はしたがひ、半分は逆らうという独自の生き方としての『人道』を生きるべき存在であるという人間の在りようである。さらに、『金毛録』言説を支える「場面性」に視点を移して検討が加えられ、聞き手の在りようとして「〈工夫〉の主体」としての人間像が見出されている。そして、これによって『金毛録』言説が生活に根ざしたリアルな〈意味〉を生み出し得ることが考察されている。

以上のことから、臨床教育という〈方法〉によって、『金毛録』という〈語り〉は天道との「宜き程」の関係をもつ『人道』世界を新たに喚起し、聞き手がみずから「〈工夫〉の主体」として受け取りなおす契機を生み出す「装置」として機能すると結論づけられている。

『金毛録』がきわめて難解と言われていたテキストであるのにたいして、第4章で取り上げられる『二宮翁夜話（以下、『夜話』）』（1884）は、二宮尊徳が農民を聞き手にして語った具体的事物に即した平易な説話であり、その内容からしてこれまで自明的に理解されてきたものである。第4章ではこの『夜話』を取り上げ、その〈言語形態〉に着目することで説話という形態に独自の役割を見出している。それは、語りの〈意味〉はつねに〈言語形態〉と一体となって表出するという見立てから生まれた〈語り〉のスタイルとしての〈語態〉という著者のオリジナルな概念である。『夜話』をこの〈語態〉という見立てに置くとき、説話はたんに事物を「実体」として語るのではなく〈実態〉という地平に出現する事物を語り出しているという在りようが現われてくる。ここから、『夜話』は固定的で一義的な意味をもつ「実体」ではなく人間の関与の仕方によりその姿が一変し得る〈実態〉としての事物を描いた語りとして発現することが論じられている。そして、〈語態〉という見立てによって、人間の行為こそが事物の〈意味〉を発現させる力であり、行為が出現するとき初めて〈実態〉世界が現われると結論づけられている。

終章では、ふたたび、世界を一時的現象として捉える〈方法〉を提起する臨床教育の在りようが考察され、本論文は、一回性や象徴性の次元で世界に出会う営みを志向する動的で可変的な〈方法〉としての臨床教育の姿を見出そうとしたものであると締め括られている。

## 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、二宮尊徳の言説に向き合いながら、そこにおけることばを一貫して〈語り〉として見立て、その〈語り〉が一時的に発現する〈意味〉に立ち合うことを試みたものであり、全体として「臨床教育という〈方法〉」について論じたものとなっている。

「臨床教育学」は、きわめて浅い歴史しかもたない学問領域である。しかし、それだけに創造的可能性に開かれており、多くの独創的な研究が期待されている。臨床教育学が照射しようとする現象は、この学問が教育という人間の営みと心理臨床の知が接点となって生まれたことから明らかなように、「人間の日常の在りよう」である。ただ、それはきわめて広範な領域に及んでいるため、ともすればその現象の開明を目指す言説が浅薄で学問的にはほど遠いものであったり、あるいはあまりに硬直化した哲学的にすぎる論述に終始し「人間の日常の在りよう」とはほど遠いものに陥ったりする危険性を孕んでいる。換言すれば、臨床教育学は「人間の日常の在りよう」を語る方法論を求めていると言うことができる。その際、複数の方法論があることはこの学問の性質からして当然のことと言えるが、たんに教育学や臨床心理学の方法論を援用するだけでは臨床教育学に真に独創的な論文とは言えない。このような点を克服する論考が臨床教育学には求められており、そうした論考の集積が臨床教育学を多くの学問領域と接点をもちつつもその独創性に光彩を放つ学問たらしめていくと言える。

このようにみとるとき、本論文は、以下に述べるように、きわめて高く評価できる、臨床教育学における学位論文のひとつのモデルともなりうるものと言うことができる。

まず、本論文が臨床教育学の対象である「人間の日常の在りよう」をまさに見つめ続けた人物とも言える二宮尊徳の言説のテキストを素材としながらも、その探究における方法論を、尊徳の精神主義的・復古主義的な研究や実証主義的な歴史分析の立場からの研究ではなく、臨床教育という〈方法〉として、新しい人間研究の可能性を探究する方法論を明確に打ち出している点が評価される。このような視座の位置は単純な発想ではなく、著者が臨床教育学の在りようを体験的に実践してきたことからたらされている。それは、実践および理論両面における出会いにおいて生まれてきたものである。具体的には、著者みずからが臨床教育の相談事例に接するなかで〈語り〉としてのことばが人間理解の回路を拓いていることを体験的に確認してきたことと、近年の言語論が提起するレトリック研究に代表されるような言語観に触れたこと、この両者の出会いである。すなわち本論文は、一見、二宮尊徳言説のテキストを素材とした文献研究の体裁を取りながらも、そこにおける論述に見て取れるように、「人間の日常の在りよう」を見つめ続け臨床教育という〈方法〉を論じた実践的な視座を一貫して保持しているのである。

さて、第1章では、以上の内容を含んで本論文の方向性が明確に論じられ、第2章では二宮尊徳の先行研究の手堅い概観がなされている。それによって本論文のその独自性をひときわ際立たせ、以降の論述が展開されている。第3章では、『三才報徳金毛録』が取り上げられている。これは、尊徳言説の奥義書と言われながらも、文言の字義的内容のみを追って解説を試みてきた従来の研究スタイルでは「難解」「読解不可能」と言われていたものである。本論文がここに新たな方法論が求められていると着目したことは大いに評価できる。

著者の提起する臨床教育という〈方法〉とは、言説におけることばを一貫して〈語り〉と見立てることによって、その言説に新たな〈意味〉が発現してくる在りように向き合うことにある。『三才報徳金毛録』においては、言説をその内容ではなく〈言説形態〉と見立て検討することによって、読解不可能とされていたこのテキストが、「人間の日常の在りよう」に新たな〈意味〉を発現する場所に出会うことに成功している。それは、天道と「宜き程」の関係をもつ『人道』世界の在りようであった。この出会いは、さらなる考察を経て、この言説が生活に根ざしたリアルな〈意味〉を生み出し得るものであると位置づけられている。ところで、このような論考はともすれば文献解釈的に陥る危険性を帯びているが、著者の根本の姿勢として先述したようにみずからの体験に根ざしているため、心理臨床の実践においてもしばしば体験される事態と繋がっており、この点で臨床的にも強い説得力をもつものであるとすることができる。

さらに、著者の〈方法〉は、第4章において、従来は自明的に理解されてきた「人間の日常の在りよう」が説話としてまとめられている『二宮翁夜話』において吟味・検討される。そのとき、これまで自明視されてきたことがらに新たな〈意味〉が発現する事態が生起することが明らかとなり、著者の〈方法〉によって「人間の日常の在りよう」を多様な〈意味〉をもつ世界として描き出すことが可能となった。この点は、著者の言う臨床教育という〈方法〉が何も特異な現象に向き合うためのものではなく、臨床教育学が対象とする「人間の日常の在りよう」に新たな〈意味〉を付与するものであることを指摘しており、臨床教育学に貢献する非常に意味深い論考となっている。また、この論考のなかで〈語態〉という著者独自の概念が提唱されている点も注目し得る。

著者は終章において、「臨床教育の研究は、……臨床教育という〈方法〉を探索する試みとして展開しつづけるのである。」と締め括っている。本論文に一貫するこのような〈方法〉は、新たな人間研究の可能性を探究する臨床教育学におけるひとつのスタイルとして位置づけることができるであろう。

以上に加えて、本論文は先行研究にも手堅くあたっており、またそれらは文献リストとしてもまとめられている。しかし、他の先行研究との差異が不明確になっている点、文化・歴史性への言及の弱さ、図の誤配置といった体裁上の問題点が指摘される。また、たとえば「イメージ」といった概念について他の学問領域との差異の言及に乏しいなど、若干、手薄のままに終わっている部分もみられる。だが、それらは著者における今後の課題となるものであり、本論文自体の学問的創見と価値をそこなうものではない。それらの問題は、著者が臨床教育学をより豊かに発展させる開拓者的な役割をはたしてゆくに当たって、大いに期待される知的挑戦の地平として広がっているものと思われる。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成17年1月6日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。